

法隆寺所蔵金属製容器の調査(2)

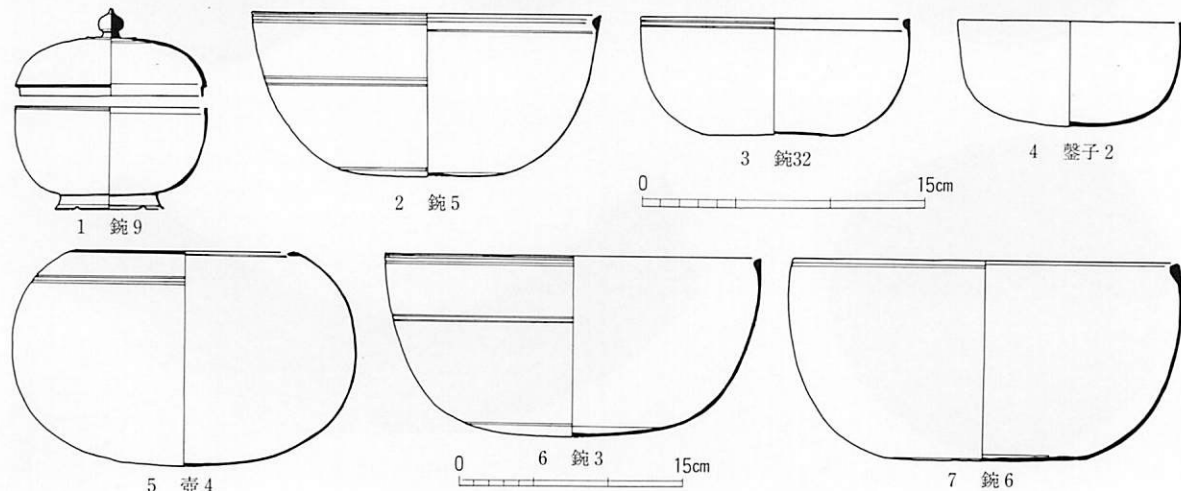
平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

平城宮跡発掘調査部考古第一・二調査室と埋蔵文化財センター遺物処理研究室では、1992年度から法隆寺所蔵の青銅製容器について、考古学的観察と科学的分析の両面から調査を行っている。1993年度には25点、1994年度には36点を調査し、法隆寺における青銅製容器の古代から近世にわたる変遷をほぼ明らかにすることができた。ここでは前回に引き続き、主に鉢・皿類について報告する。

1. 考古学的調査

古代の青銅製容器は、いずれもロクロで厚さ1mm前後に削り、薄手に仕上げるのが特徴である。丸・平底鉢は口縁部内端が肥厚し、体・底部の内・外面に多数の沈線がめぐるもの(2・6)と、口縁外縁に1条の沈線がめぐるもの(3)とがある。前者は古墳出土品に類例があり、6世紀末～7世紀前半、後者は法隆寺献納宝物(東京国立博物館蔵)の八重鉢と同類であり、8世紀に入ろう。口縁部がほとんど肥厚しない無文の丸底鉢(4)は、正倉院宝物(加盤第14号)に類似し、8世紀中頃になろう。高台付鉢は大きくみると、鉢身に返りのある半球形の蓋が伴うA類と半球形の鉢身に返りのある笠形の蓋が伴うB類が6世紀末～8世紀前半頃であり、8世紀前半以降は口縁部で外反する鉢身に返りのない外被せ蓋が伴うC類に主流が移る。A類の小型品(1)は前回報告した7世紀後半の鉢4より鉢身・高台とも底く、高台に4カ所切欠きを入れて花卉形につくる点も新要素である。8世紀前半頃に比定できよう。鉄鉢型(5)は丸底で、口縁部内端が肥厚する点などが6世紀前半の百済・武寧王陵出土品に酷似する。8世紀中頃の東大寺例では底が尖り気味となり、口縁部の肥厚や沈線文もなくなる。皿2-1と2-2(14・15)は正倉院宝物と類似し、8世紀中頃に比定できよう。

中世の青銅製容器はいずれも厚さ3mm前後と古代に比べて厚手とみる。密教系の容器が主である。前回の報告では六器について、平安時代後期～鎌倉時代前期には鉢の体部が外反気味で、托の高台が低いこと、鎌倉時代中・後期には鉢の体部が直立し、托の高台が高くなること(11)、室町時代には托の高台がさらに高くなること(12)を指摘した。今回報告する鉢10・13・14(8～10)は比較的薄手であり、8が平安時代後期頃、9・10が鎌倉時代前期頃と推測する。六器20(13)は天保15年(1844)銘銘に伴う「○」「◎」の刻印がある。托の高台は一段と高くなる。大型の鉢6(7)は古い要素を残すが、やや厚手であり、平安時代後期か中世初頭頃の擬古作の可能性はある。高台付皿(16・17)は材質の分析から中世に比定。高台の高い皿5(18)は室町時代であろう。(毛利光俊彦)



第1図 古代の青銅製容器(1～4は1:4 5～7は1:5)

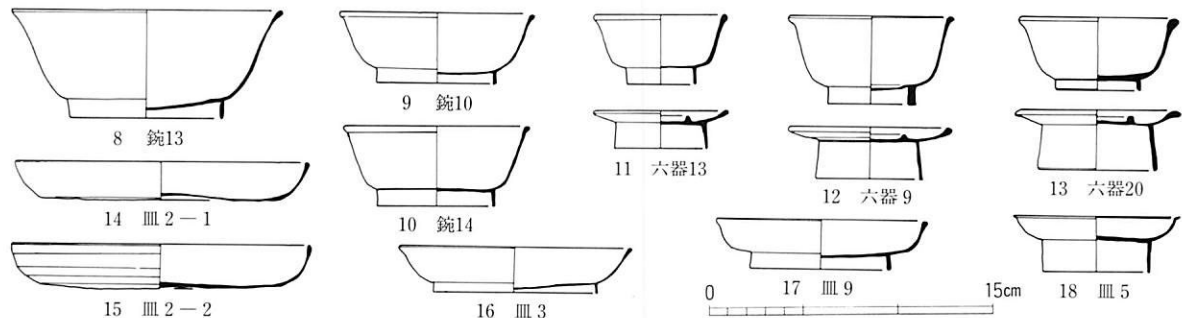
2. 科学的調査

昨年度に引き続き法隆寺所蔵の青銅製容器に対する構造と材質の科学的調査を行った。構造調査はX線ラジオグラフィー、材質調査は非破壊的手法による蛍光X線分析法による。今年度の調査対象はこれまで系統的な調査が行われていない中世から江戸時代のものも多く、古代のものと合わせて金工材料の歴史的変遷を考える上で貴重なデータを蓄積することができた。青銅の基本は、銅と錫の合金である。この基本を忠実に守っているのが古代（6～7世紀）の「佐波理」であることは昨年報告した。20%前後の錫を含んだ銅合金で他の不純物も少ない（壺4、鉢3・5・32）。仕上げは極めて薄い。形態的な変遷との相関で見えていくと、時代が少し下がり8世紀に入ると、錫の量が減る一方、鉛の量が増加してくる（鑿子2）。さらに中世に入ると、鉛の量が10%を超えることもあり、代わりに錫が数%まで少なくなる（鉢14、皿9）。それに伴い器形も厚くシャープさを欠くようになる。平安時代のものともみられる器物に対しては、まだはっきりとした特徴を掴み切れていない。江戸時代の特徴として挙げられるのが、銅一亜鉛合金である黄銅（おうどう）の登場である（六器20）。これまでも、黄銅の出現はかなり遅れるとみられてきたが今回の一連の調査においても例外ではなかった。ただし、黄銅は正倉院宝物でも確認されており、人為的に製作された黄銅の始源の問題は今後の大きな課題である。また、鉢9のように、器形の変遷と材質、特に銅、錫鉛の含有量の変化との相関だけでまとめてみても合わないものもあり、他の元素を考慮に入れた再検討も必要と考えている。金工技法の中で特に接合の問題に関する情報を引き出せる器物も数点ある。今までのところ古代において使われたことを確認できている銀鑢（銀一銅合金）を認めるに至らず、例えば鑿子5底部に残る接合の痕跡から錫が優位に検出された。この点についても今後の検討課題の一つである。わが国における金工品の古代から近世に至るこれだけ多くのまとまった資料を同じ手法で分析した例は初めてであり、この成果の詳細を改めて発表する機会を持ちたい。

（村上 隆）

法隆寺所蔵青銅製容器の非破壊手法による蛍光X線分析の結果 (wt%)

	銅	錫	鉛	鉄	銀	亜鉛	ヒ素	ビスマス	金	マンガン	アンチモン	水銀
壺4	74	24	0.4	4.4								
鉢9 (蓋)	76	10	13		0.2		0.5					
(本体)	80	15	4.6		0.2				0.4			
鉢5	77	22	0.2	0.5	0.5							
鉢3	78	22		0.2	0.1							
鉢32	80	19	0.1	0.4	0.8							
鉢6	82	14	3.5	1.0	0.1							
鑿子2	77	18		3.3	0.2	0.8		0.5	0.1			
鉢13	81	8.8	8.9	0.4	0.2	0.2	0.8					
皿2-1	81	18			0.8		0.4	0.1				
鉢14	75	6.2	11	3.0	0.2	0.3	4.1					
鉢10	83	10	56	0.3	0.4		0.7					
皿9-1	80	2.6	15	0.7	0.1		2.8					
六器13	91	5.6	2.0	0.5	0.1							
六器9	87	5.6	3.2	0.6	0.2		1.1		1.6	0.3		
皿3	84	3.9	9.4	0.3	0.3		1.7					0.5
六器20	66	0.5	15	0.6		31						
皿5	79	2.6	15	0.7	0.1	0.5	1.9			0.5		
六器5	75	8.3	15	0.8	0.2		0.6					



第2図 古代～近世の青銅製容器 (1:4)